
メディアウム・スペシフィシティーの適用条件について

一ノ瀬健太(東京藝術大学)

本発表は、一般に芸術として定かでない領域の人工物に対しメディアウム・スペシフィシティー概念が適用可能であるための条件を明らかにする。メディアウム・スペシフィシティーとは、素材や媒体に固有の性質のことを示す美学・批評用語であり、モダニズムの美術批評の理論的展開において重視され、特に批評家C・グリーンバーグの言説によって広まった概念である。これまでそれなりの批判はあれど、詩や絵画、彫刻といった定まった芸術形式に対して「純粋さ」が問われる議論が展開されてきた。R・クラウドはE・ルーシェやC・マークレイを挙げ、「車”や”音と映像の同期」といった旧来の美術として確立していない形式にメディアウム・スペシフィシティー概念を適用する批評を展開した。モダニズムからポストモダニズムにかけて、メディアウムはその「純粋さ」を前景化させながら批評の対象として芸術形式の範疇を拡大してきた歴史がある。

本発表は芸術として未だ定まっていない領域に対する芸術定義の適用時に芸術定義が適用可能かどうかひとつの参考となる知見を提供する。美学芸術学の概念である純粋性の概念を美学芸術学分野以外のモノや現象に置いて吟味することはテロリズムまで芸術の射程に据えようとしている芸術定義の拡散に一定の境界を設けることに貢献ができる。あるモノや事象に対して芸術か否かではなく、その事物に「純粋さ」の概念が適用可能かどうか吟味することで芸術定義の新たな見方を見いだすことが可能となる。

発表者はまず、芸術形式として確立していない、いくつかの人工物の例をあげ、その中でメディアウム・スペシフィシティーの概念が適用可能なものと可能でないものを区別する。その際に、A・ダントーの『The Artworld』(1964)とK・ウォルトンの『Categories of Art』(1970)を援用しながらスペシフィシティーが適用可能かどうかの条件を探る。現段階においてスペシフィシティーが適用可能な条件として2つの可能性を提起したい。ひとつは美的な評価の位置付けとして理由を伴った批評がそのジャンルにおいて成立しているということであり、ふたつ目はその批評の実践の中で評価項目が分節化されている、ということである。本論はウォルトンが掲げる可変的性質(Variable)によって批評の場は実践され、その可変的性質の分節化が評価項目であるという考えに依拠する。たとえばラーメンである。ラーメンには批評実践の場があり、評価項目として麺、スープ、具材など多岐にわたる評価項目があり、その美的な評価項目が挙げられる。そのほか車などの人工物に対しても同様に批評実践の場があり、そこに評価項目が分節化している状況を確認した上で、その美的評価項目を精査し、それぞれの人工物におけるメディアウム・スペシフィシティーの適用条件を吟味する。